教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 教育学科　　資格： 准教授　　氏名： 西山　裕子

研究分野	研究内容のキーワード
イギリス文学、英語圏の文学・文化、英語文学教育の実践	イギリス文学（英国十九世紀女流作家）、英語圏の文学作品と文化、英語文学教育
学位	最終学歴
博士（文学）、修士（文学）、学士（外国文化）	関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程英文学専攻（文学）修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.現代社会における比較文学の実践と探究	2021年4月～現在	2019年度4月の新学部設置以来、教育学科では新カリキュラムの科目として英語圏の文学と文化を比較検討する科目を複数開講している。3年生を対象とした「英語文学と日本」や「英語文学と世界」といった科目において、自国と諸外国の言語・歴史・文化を比較することで、受講生が言語活動への関わりに対する気づきと発信力をつけることができるような教材を選び、リスニングやライティングを積極的に取り入れ、領域横断的な学修の機会を提供している。
2.保育現場で活用できる英語文学（絵本）の実践	2020年9月～現在	教育学部の2年生を対象とした後期科目「英語児童文学」において、児童英語に応用可能となる英語文学の様々なジャンルを取り上げて、音声やリズムの指導などを意識しながら、英語の絵本や物語（原作）を楽しみながら学ぶ機会を提供している。特に、この授業の特徴は、幼小接続を踏まえて、幼保コースの学生にとって有意義な英語活動の場を提供する工夫を凝らしていることである。
3.クラスルーム・イングリッシュの実践と応用	2020年4月～現在	教育学部で担当しているゼミナールにおいて英文学の基礎的な知識を応用しながら、小学校英語への活用方法を研究し、学生を主体としたゼミ活動に取り組んでいる。特に、専門分野である英語英文学において小学校教員に必要となるテキストと教材を援用し、教育現場で活用できる「クラスルームイングリッシュ」を採り入れて、初等教育において必要な英語力の定着と背景知識への理解を促進するための活動を継続している。
4.エッセイ・ライティングの指導と実践	2019年9月～現在	教育学部では、現場で使える教室英語の修得を目指す以上、他の学科のようにライティング活動への指導時間が多いとは言いがたい現状にあって、新たに設置された中学校英語コースへの対応策のひとつとして、「書くこと」によるコミュニケーション能力向上のための演習を「エッセイ・ライティング」の形で採り入れている。
5.外国語活動と英語科で応用するための音声指導	2019年9月～現在	教育学科一年生を対象とした英語科目において、教職で必要とされる基本的な発音の構造を説明しながら、CALL教室のシステムを活用して音声指導を行った（2022年1月実施分の授業まで）。2022年4月以後は、外国語コミュニケーションIおよび、Ⅰ Ⅰの授業と教育演習・卒業研究といった授業において、必要に応じて（可能であればCALLシステム・キャラボを用いて）実践的な音声指導を実施している。この音声指導は、幼・保コース、小学校コース、小・中学校コース、国際コースにおいて教職課程の資格を希望する学生に対して担当する授業内で実施し、学生が現場で活用するための英語力の定着を目指している。
6.外国語コミュニケーション活動の実践	2019年4月～現在	教育学科の二年生を対象とした科目において、ネイティヴの教員が行う活動と同様に、実践的なコミュニケーション力を目指したスピーキングとリスニング演

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
7.文学作品の読解演習と翻訳	2017年4月～現在	習を行っている。特に、授業内容については、Nativeの教員と常に連携をとりながら、クラスのレベルに応じた内容把握演習を繰り返し行うことで、教職で活用できる英語力の基礎を固める工夫を凝らしている。 2017～2020年まで、短英（英文）に所属する学生の理解度を深めるために、英米の文学史と著者に関する略歴および、歴史的文化的背景の概略を、英語で書かれた資料で提示し、読解演習の一環として随時解説を加えながら内容把握演習を実施した。特に、事前に資料を配布することで、学生の自発的な読解を促し、その上で授業時に予習箇所について解説を加えて、学生の学びが深まるように配慮した。短英で実施した2020年度の遠隔授業においては、科目目的の修得を目指して、作品の背景・文学史における位置付け・登場人物の描写に関する考察・プロットの分析など、初めて本格的に文学作品を読了する学生にむけて議論の場を提供し、自己学修の在り方を再検討した。2020年度秋学期以後、現在は、ゼミおよび、「英語文学入門」科目で、教育学部において教職を志す学生を対象に、将来的に学生が教師となったときに教育現場で活用できるような文学作品の在り方を提示し、英語文学を通じて現代の社会問題について議論を深めて意見を発信することができる機会を提供している。
8.英語音声学の理論と実践	2017年4月～2020年3月	大英（英文）において留学を予定している学生を対象に、明瞭な発音ができるように、IPAを応用した実践的な訓練をCALL教室のシステムを活用して繰り返し行った。また、音声学の知識を応用して、リスニング力の向上や資格試験の習得に向けた訓練を重ねることで、学生の「音」に対する意欲を高めるように授業内容に工夫を凝らした。
2 作成した教科書、教材		
1.中学校で活用できる英語文学作品資料集	2020年9月～現在	中学校教諭第一種免許状取得を目指す学生を対象として、中学校の教科書でいまなお受け継がれている「文学作品」を中心に、時代背景、プロット、指導上のポイントなどを解説した資料を作成し、必要に応じて授業で配布している。
2.発音の秘訣	2019年4月～現在	教育学部における、一年次と二年次の担当クラス（科目）において、学生の学びの目的（幼保・小学校など）に応じた、発音演習プリントを作成し、音声指導の一環としている。
3.英米文学史の概説	2017年4月～現在	英米文学史、時代背景、著者の文学的背景などについての資料を作成し、教材の一部として活用している。 なお、資料は読解演習の一部になるように英語で提示している。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.ボランティア翻訳と派遣スタッフ、特に、国際見本市での通訳・大使館業務	1996年10月～1999年12月	通訳学校での研修を経て、プレス向けパンフレットなどのボランティア翻訳スタッフとして英語活動に従事した。また、通訳学校からの派遣により、国際見本市・総領事館への派遣スタッフとして翻訳と通訳の実地経験を重ねた。大学院で学んだ英語文学を社会で活用するために、英語による実務経験の幅を広げながら海外から来日した現地スタッフと連携を図って業務を行った。
2.児童英会話講師	1994年4月～1995年9月	東京都にある英会話学校で幼稚園児を対象に、文字指導の導入、フラッシュカード・歌遊びを用いながらロールプレイをするなど、オーラル・コミュニケーションを中心とした活動を全回、英語で行った。
4 その他		
1.日本ブロンテ協会役員	2023年10月～（就任予定）	日本ブロンテ協会（全国・公認学術団体）における評

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
		議員に就任内定
2.附属高等学校３年生を対象とした高大連携事業（入学前教育・模擬授業）の実施	2023年2月13日～2月16日	第一回目のテーマは「英語児童文学入門講座ー基礎編」である。諸外国の子どもたちがどのように母語としての英語を学び、どのように「遊ぶ」のかについて、イギリスの児童文学作品から一部を抜粋して模擬授業を行った。第二回目のテーマは「英語児童文学入門講座ー活用編」である。第一回目の児童文学作品の読解と解釈を経て、「子どもの遊びと英語」や「教室での英語児童文学の活用方法」について議論しながら、英語教育における英語児童文学教育の在り方について講義した。
3.兵庫県立芦屋高等学校における模擬授業の実施	2021年2月18日	兵庫県立芦屋高校の１年生を対象として行われた分野別発表会（教育学希望者向け）で講評を行い、そののち英語教育に関する講義を実施した。講義の題目は、「大学での英語――実践英語リスニング」とし、英語教育の現状を俯瞰したのち、共通テストや英語検定試験からの抜粋問題を取り上げて、リスニングと英文読解が相互関係にあることを検証した。
4.日本ブロンテ協会関西支部事務局次長	2020年9月～現在	事務局長の補佐役として、日本ブロンテ協会関西支部の運営全般に携わる。特に、学会運営、事務と総務に関する業務、学会員への諸連絡などすべてに目配りし、学会運営が円滑に進むように事務局長と連携をとりながら業務内容を進めている。
5.附属高等学校IE系の学生を対象とした模擬授業の実施	2019年11月11日と2019年11月25日	武庫川女子大学附属高等学校3年生IEコース（教育専攻希望者）の生徒を対象とした英語の授業を2回に分けて実施した。第1回では、高校英語と大学英語の学びの違いを実際の高校英語の教科書を引用しながら体現（再現）し、第2回目では、英語を理解して修得する方法を絵本・映像を用いて提示した。特に、第1回目でグループ分けをして、グループごとに課題を与え、第2回目ではグループワークの結果を発表してもらうこと、事後のフォローアップとして全員の課題を添削して各自にコメント付きで返却するなど、附属高等学校の教員と連携しながら大学におけるアクティブ・ラーニングの様相を提示した。
6.教育学科2年生英語科目のコーディネート業務	2019年04月～現在	科目の運営・授業内容に関する統括・ネイティヴの教員との連携を重視しながら、「外国語コミュニケーションI、II」科目において学生が円滑にかつ、安心して授業に取り組みことができるように、コーディネート業務を行っている。業務内容には、学科の日本人教員と外国人非常勤講師の先生方の間で、特に事務的・教務的な側面において相互理解を促す役割も含んでいる。
7.授業アンケート結果に基づく授業方法の改善・実施	2017年4月～現在	武庫川女子大学において一斉に実施されるアンケートの他に、①授業の進度について②授業内容（実施方法）改善に関する学生の意見調査を必要に応じて複数回実施することで、より、フィードバックの重要性を踏まえて、学生により充実した学習環境を与えられるように担当科目（2017～2020年度は大英・短英、2019年度～現在は、大教・新教）で努めている。
8.平成２０年度日本ブロンテ協会奨励賞佳作受賞	2008年10月	所属学会の学会誌への投稿、審査を経て受賞した。本論文をブロンテ研究の基盤として、以後研究活動を続けている。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.高等学校教諭専修免許状（英語）	1996年3月	（免許状番号:平8高専第10207号）
2.中学校教諭専修免許状（英語）	1996年3月	（免許状番号:平8中専第10199号）

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
3.高等学校教諭一種免許状（英語） 4.中学校教諭一種免許状（英語）	1994年3月 1994年3月	（免許状番号:平5高一種第1708号） （免許状番号:平5中一種第1717号）
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1.英国ケンブリッジ大学英語研修（国際英語・英文学コース）参加	1994年7月～1994年8月	Girton Collegeでの研修（英文学講座）を経てケンブリッジ大学が主催するインターナショナル・サマースクールにおいてケンブリッジ大学の教員が行う国際英語と英文学などの授業（講義やディスカッション）を受け、修了証書を得た。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.「女たちの言説――面影の町『ヴィレット』における結末（エンディング）」	単	2016年3月	大阪教育図書 『文藝礼讃――イデアとロゴス』	イギリスにおける英語文学が日本のみならず世界の多くの国々の女性たちの言説と関係し、いかにして共通のテーマを有するのかという問いを内包した作品がシャーロット・ブロンテの遺作『ヴィレット』であろう。とりわけ、語りの視点がブロンテ文学の中核をなしていると考えられてきたが、彼女の語り口は冒頭から破綻している。ゆえに、曖昧だと評されてきた結末部分は、四技能における「読み」を追求していくと時代の渦の中で抑圧されなければならなかった「生」への挑戦と抗議を示していることがわかる。(pp. 203～214)
2.『ブロンテ姉妹の世界』	共	2010年9月	ミネルヴァ書房	本著作が他の研究書と違う点は、国内外の一般愛好者から研究者まで幅広い層に向けてブロンテ文学の真価を問いかけ、作品を「読む」上でブロンテ作品の再読について読者に再考の機会を与えている点である。『ヴィレット』の本質は単にあらすじだけで解明することは不可能ではあるが、女主人公ルーシー・スノウの苦悶に満ちた内面描写に切り込むように全体を筋立てて追っているところに本著作の特徴がある。心情を描きながらも長編を端的にまとめることを主眼とし、日本のみならず幅広く世界の批評史に新たな視点を投げかけるよう努めた。(pp. 199～206) 著者：西山裕子、内田能嗣他
3.『あらすじで読むジョージ・エリオットの小説』	共	2010年2月	大阪教育図書	ジョージ・エリオットの作品では村人たちの談話分析が重要な意味を持つ。つまり、対人コミュニケーションの成立を「読み込む」ことなくして、作品の解釈は不可能であるといっても過言ではない。この『牧師館物語』で小説家エリオットの出発点となる、数々の問題提起を含む場面をくまなくあらすじに組み込むことによって、のちの作品に影響を与えたプロットがより明確になり、その結果としてエリオットの全作品の研究方法や受容についての新たなる出発点が見いだされると考えられるであろう。（pp. 3～11） 著者：西山裕子、内田能嗣、原公章他
2 学位論文				
1.A Voice of One’s Own: A Study of Charlotte Brontë’s Autobiographical Fiction	単	2012年03月	関西学院大学 （博士学位論文）	シャーロット・ブロンテの小説は自伝的要素が色濃いと評されてきた。なぜブロンテは一人称の語りの手法を用いたのだろうか。この疑問を解明するために初期作品から遺作まで、各作品の特徴と主人公の造形にみられる変遷を精緻に辿り、同時に時代に沿った「読み方」を追求することでブロンテが自分の考えを代弁する最も適した語り手を創造しなければならなかった「理由」をまとめた。その際、オーディオ・ブックスなどの媒体にも着目して、「音」をヒントにして主人公の内奥を引き出すことが出来るように精読しながら四技能の「読み」を深めていき、ブロンテ作品を「ヴィクトリア朝におけるキャノン」に位置づけた。全6章。（論文は英語表記）
2.The Moral Conflict in George Eliot’s Early Novels: Between Self and	単	1996年3月	津田塾大学 （修士学位論文）	英国十九世紀の女流作家、ジョージ・エリオットの作品研究においては、後期の長篇の分析が多い。しかしながら、彼女の作風が1857年の処女作の執筆を終了した頃にはキリスト教信仰から「人間」信仰への回帰を反映していることを踏まえると、初期作品群にのなか

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
Community				に他者への共感の重要性が描かれていると考えられる。このようなジョージ・エリオット作品の解釈は、論文執筆当時には研究基盤とされていた。しかしながら、この研究基盤にあえて考察を加えることにより、共同体社会における人間の心情の内奥、共感を求めて葛藤する個人の生き方に関して、ヴィクトリア朝社会の時代的背景を踏まえて議論した。序章、本論3章、結論の全5章。（論文は英語表記）
3 学術論文				
1.”The Rover”再考ーブランウェル・ブロンテの作品における海賊ー（査読付）	単	2023年3月	『武庫川女子大学紀要』第70号（武庫川女子大学）	19世紀英国の作家ブロンテきょうだいのひとり、ブランウェル・ブロンテは戦争をテーマにして幼少期から姉妹とともにアングリア物語の世界を紡ぎ出し、海賊パーシーに自らを重ね合わせて詩作品を描き続けた。本稿では1832年頃から1837年頃までに書かれたとされているブランウェルのアングリア詩から「海賊船ローバー号」(”The Rover,” 1834/1837）を取り上げて、海賊ロウグことアレグザンダー・パーシーを通じて、ブランウェルが旧い海賊像と対照的な新しい海賊像を描き出すことを試み、独自の視点で海賊たちの歴史を再構築しようとしたことを明らかにしている。（pp. 39-47）
2.文学作品と英語教育――小・中学校における活用にむけた“The Last Leaf”の再評価（査読付）	単	2022年3月	『教育学研究論集』第17号（武庫川女子大学大学院）	本稿では,文学作品と英語教育との関係について,たびたび議論がなされてきた現状を踏まえながら,2020年度から,小学校,中学校,そして高等学校へと段階的に施行されてきた新学習指導要領の実施に伴い,英語文学教育を効果的に導入することで,英語のコア・カリキュラムで提唱されている学習目的が達成されることを示した。特に、中学校の検定教科書で取り上げられることが多くあった,O.ヘンリーの短編小説“The Last Leaf”をめぐって,学生が将来,教師として英語文学教育を実践するときどのような取り組みが求められ得るのかなどについて,調査結果をもとに,文学作品を用いた英語教育実践の可能性を導き出した。
3.外国語教育と音声指導 ――英語専修プログラムにおける課題と展望―― （査読付）	単	2021年3月	『教育学研究論集』第16号（武庫川女子大学大学院）	本稿では,児童や生徒のコミュニケーション能力を高めるという目標を達成するために,英語文化学科で行われてきた音声指導と演習とを、教育学科の英語専修プログラムに採り入れることが有益であることを提唱した。また、教育学部のカリキュラムにおいて中学校教諭第一種免許状取得希望者を対象とした音声指導の意義と今後の課題を検証した。
4.多読と精読――外国語コミュニケーションのための実践的アプローチ――(査読付)	単	2020年3月	『教育学研究論集』第15号（武庫川女子大学大学院）	英語教育において2020年度から新たな取り組みが始まることで、これまで英語力を測定する際に大きな比重を占めていた「読む」「聞く」という２技能に加えて、「話す」「書く」技能がより重視されていく今後の４技能統合型の英語学修において、いっそう領域統合型の授業運営が求められるようになる。４技能のうち特に「読む」と「話す」技能について、これからの英語教育で外国語コミュニケーションにむけた英語表現力を向上させるために、どのように対応することが望ましいのであろうか。本稿では、新中学校学習指導要領を念頭に置くとき、多読と精読、この二つの技法は、アウトプット型の言語活動を補完し合いながら、小学校の外国語活動と、外国語科を経て、中学校の外国語科（英語）を接続し、コミュニケーション・スキルの基盤を確立する可能性を多分に含意していることを論じた。
5.シャーロッ ト・ブロンテ『ヴ ィレット』におけ る反復――「霧」の 描写――（査読付）	単	2011年3月	『英米文学』第55巻（関西学院大学英米文学会）	物事は繰り返されるとき、「何らかの意味を持つ」とブースが指摘するように、本論では「霧」の繰り返しに意味があることを解明するために、特定の場面に絞って分析を進めた。また、コミュニケーションをとるうえで重要な役割を担う「時制」、「形容詞」や「副詞」といった品詞の使い方にも注目し、女主人公の自己表現方法に関する特殊な語彙の使い方を例に挙げて分析した。その結果、ルーシー・スノウが意識的にエンディングを隠蔽することは独自の語りの特徴を示すものであることを指摘し、物語の結末に顕著な「曖昧性」の意図に意味付けを行った。（pp. 69～91）
6.シャーロット・ブロンテ『教授』における「虚飾」の意味（査読付）	単	2009年12月	『関西英文学研究』第3号（日本英文学会関西支部）	本作には、後の小説において文学史上主要な女性主人公が出現することを予示する重要な要素が隠されている。それが示されているのが、主人公ウィリアム・クリムズワースが経験したベルギーの「虚飾(gilt)」という表現である。つまり、「読み」という行為を深め

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				ていけば、多角的な読解方法によって言葉が多様な意味を導き出すために必要不可欠な媒体となっていることが分かる。男性主人公に代わって、後半部分では「フランシス・アンリ」という女性が語りの中心を担うようになるからだ。本論ではこの二人を「主人公」と捉え、時に聖書の文句を援用しながら、語り手の「性」が移行する過程とその必要性に迫った。(pp. 77～96)
7.『アグネス･グレイ』における隠された姉妹像 （査読付） 2008年度日本ブロンテ協会奨励賞佳作受賞論文	単	2008年10月	『ブロンテ・スタディーズ』第4巻・第6号 （日本ブロンテ協会）	欧米のみならず日本における「姉妹」関係にも通じる「（女教師）アグネスの沈黙」というコンテクストで本作を分析することによって、語りの効果的な役割を検証した。アン・ブロンテが描いたアグネスは、自己表現を抑制したヒロイン像の原型となっており、彼女の語り口は、沈黙によってより効果的な言語表現へと転化している。四技能にとって欠かせない、緻密な「読み」と解釈によって、「沈黙」は、ヴィクトリア朝の時代を背景にガヴァネスとなったアグネスが自分を取り巻く環境に抗い、向き合おうとする態度を端的に示していることがわかる。(pp. 33～46)
8.『ジェイン・エア』――ジェイン･ロチェスターの「自伝」を読む（査読付）	単	2008年3月	『英米文学』第52巻 (関西学院大学英米文学会)	副題に明記されている『ジェイン・エア――「自叙伝」』見られるように、本作は言わずもがな、語り手で主人公「ジェイン」の自伝である。しかし、ここでいう「ジェイン」とは語りの現在にいるわたし、つまり、ロチェスターと結婚して幸福な家庭を築き上げた「ジェイン」なのか。それとも、物語の時間にいるわたし、孤児「ジェイン・エア」なのか。本研究ではジェイン・ロチェスターとしての「過去と現在」の差異と主人公「ジェイン」の意図的な時間操作によって生じた歪曲に焦点を当てながら、本書を「ジェイン・ロチェスター」の自伝として再読することによって、語り手ジェインの性質を分析しなおした。(pp. 53～71)
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.戦争と恋愛のはざま――アレグザンダー・パーシー考		2012年10月	2012年度日本ブロンテ協会全国大会 （於、大東文化大学） 全国大会、シンポジウム発表： 題目：「ブランウェル･ブロンテの詩を読む Ⅱ」	本発表ではブランウェル・ブロンテのアングリア戦争詩に焦点を当て、その特徴を概観した。とりわけ、これまで言及されてこなかったブランウェルのロマンチストとしての様相が、バイロンの詩を模す形で表れていることに着目してチタムの論考に再評価を与えた。概要は以下の通り。 戦争と政治抗争――これまでブランウェル研究は、この二点に絞られて読み解かれてきた。しかし、恋愛を主題とした初期のアングリア詩は、主人公アレグザンダー・パーシーに別の価値観があることを示唆しているのではないだろうか。本発表では、ブランウェルによって1837年に(PBBの署名で)書かれた断片的な数編の詩――‘The Rover’, ‘The An-grian Hymn’, ‘Augusta’――を一連の物語詩として統合し、アングリア物語の解釈に必要不可欠な登場人物とキーワードにも触れながら、「海賊」パーシーが戦いを好みながらも、その一方で恋愛にも傾倒する所以を考察した。
2.Villetteにおける「霧」の描写		2009年10月	2009年度日本ブロンテ協会全国大会 （於、横浜市立大学）	語り手で女主人公のルーシー・スノウは、冒頭からエンディングに至るまで自分の本心を隠そうとし、その解釈を「読者の想像力に委ねて」いる。なぜ彼女は自らの心情を隠さなくてはならなかったのだろうか。その意図を探るために、ルーシーにとって人生の岐路に、必ず現れる、一つの自然現象に着目した。「霧」である。 「霧」の描写を通じてルーシーの言葉の隠蔽と自己抑制が次第に紐解かれていく様を追うことによって、最終的には、ルーシーの真意を彼女自身の主体性の問題と関連づけながら「曖昧なエンディング」の意味に迫った。
3.The Professorにおける「虚飾」の意味		2008年12月	日本英文学会関西支部 第3回大会 （於、関西学院大学）	『教授』は、シャーロット・ブロンテの処女作でありながら何度も出版を拒否された挙句に彼女の死後やっと出版に漕ぎ着けた「問題作」である。にもかかわらず『教授』は、『ジェイン・エア』に繋がる要素を多分に含んでおり、後の『ヴィレット』のテーマを先取りしていることから、作家ブロンテにとって転機となる、重要な作品だといえる。このように『教授』から『ジェイン・エア』の橋渡しとなっている、テーマの移行を示唆する「萌芽」とは何なのか。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
4.Jane Rochesterが「語る」もの		2007年07月	2007年度日本ブロンテ協会関西支部夏季大会（於、関西大学）	「虚飾」という、一見したところ他愛のない描写を通じて、主人公クリムズワースの潜在意識に新たな側面が浮かび上がる過程を、序文の言葉が含意する意味を解釈しながら、他の登場人物との関わりで分析した。 回想形式で語られる「わたし」の過去は、語っている現在という時間にいる、「ジェイン・ロチェスター」としての「わたし」ジェインという視点ではどのように「語りなおされて」いるのだろうか。一人称の「わたし」のジェインはその重層的な語りによって何を伝えようとしているのだろうか。この問題について、現在から過去に遡るときに見られる物語の歪曲に争点を当てることによって、歪曲しながらも着実に語りの現在の私の見方を読者に提示していく語り手「ジェイン・ロチェスター」の戦略的な手法を分析した。
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.英語教育におけるブロンテ文学――Graded Readersと誤謬	単	2024年1月刊行予定	「Purple Heather:日本ブロンテ協会関西支部ニューズレター」第23号（日本ブロンテ協会関西支部）	新学習指導要領における教材選定の観点のひとつである「物語」の応用について英語文学的見地から提案。特に、Graded Readersシリーズを主軸とした物語への理解では、文学作品の解釈が歪曲される可能性があることを指摘し、文学テクストの導入に再検討の余地があることを述べた。
2.シャーロット・ブロンテの名言集についての一解釈	単	2022年11月	「Brontë Newsletter of Japan」第105号（日本ブロンテ協会）	たくさんの詩の中から一部を抜粋して、シャーロット・ブロンテが1843年に書いたとされている詩 'Evening Solace' を取り上げた。この詩に秘められているのは「想い、希望、夢、愉しみ」であり、この詩では彼女のひそやかな願い―「時間のもつ癒しの力」を信じて未来を想う様を読み取ることができると結論づけた。
3.Brontë Triangle：「英語教育とブロンテ文学――教育学科における英語文学教育の現在（いま）」	単	2021年11月	「Brontë Newsletter of Japan 」第103号（日本ブロンテ協会）	英語文学を教育に活かそうという試みには長い歴史がある。しかしながら、所属学科における学習の目当て・目的を意識した「試み」という点から英語文学を捉え直すことは見過ごされがちであったといえはしないか。教育学部で重要な点は、「（小中接続において）授業に活用できるか否か」である。本エッセイでは、教育学科と英文学科における科目目的の違いに焦点を当てながら、教育学部における英語文学の現状を報告した。
4.教壇にたって――英語教育のなかの英語文学	単	2020年3月	「英米文学会会報」第124号（関西学院大学英文学研究室）	本エッセイでは、英語教育のなかで英語文学をいかに導入して、実践的に学生に指導する必要があるのかを教育学部における英語修得の現状を踏まえて論じた。特に、これからの英語学習活動にとって、「音」が重要な機能を果たしうること。その際に、音声学上の「区切り」を認識しながら読み書きを行う必要性があること。（言い換えれば、教育現場ではこの方法を学生が教えていく必要があるということ）また、このように考えてみると実は、「区切り」という概念は英語文学においても非常に重要な役割をしているという観点によって、2020年度に施行される新学習指導要領の「英語の教科化」への対策を講じることが出来うると指摘した。(p.1)
5.ディアドリ・ル・フェイ著、『ジェイン・オースティン家族の記録』	共	2019年07月	彩流社（内田能嗣・惣谷美智子編）	原著はDeidre Le Feye, Jane Austen: A Family Record。ジェイン・オースティンの伝記についてはこれまでに数多く出版されているが、本書はその中にあっても、とりわけ、現存する伝記の中で比類のないほどにオースティン像を細部にわたって緻密に映し出していると考えられている。全586頁。日本オースティン協会、及び日本ブロンテ協会所属の会員による分担訳。
6.マリアン・トールマレン著、『歴史のなかのブロンテ』	共	2017年02月	大阪教育図書翻訳（共訳）	原著はスウェーデンで著名なブロンテ作品研究者Marianne Thomahlen編によるThe Brontës in Context。日本ブロンテ協会30周年事業の一環として本著に収められた42章をそれぞれ、協会のメンバーが中心となり翻訳。担当箇所は第25章、Patsy Stonemanによる映像論。原題は 'Adaptations, prequels,sequels, translations' で、この章では『ジェイン・エア』と『嵐が丘』に関する翻案作品の変遷とその特徴が時代の流れに沿った受容のありかたを踏まえて明記されている。全556頁、分担訳。(pp.255～265)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
7.コミュニケーション考：まさかの「修行」――後日譚	単	2015年3月	『英米文学』第59巻・第2号（関西学院大学英米文学会）	本エッセイにおいて、「コミュニケーション」がいかに文化的・歴史的背景によって、学びと言ういわば「修行」の場に影響を与えるのかについて談話分析の手法を婉曲的に用いながら述べていった。つまり、会話の成り立ちの過程や会話そのものの在り方によってコミュニケーションという言語ツールがいかに時代背景を映し出しているのかを数々の対話を引き合いに出しながら、特に十九世紀のイギリス文学と現代の日本との違いを考慮したうえで、「会話」のバリエーションは結果として文化的な要因に左右されながら多様な解釈を引き出していることを論じた。(pp.121～122)
8.サラ・フェルミ著、『エミリの日記』	共	2013年04月	大阪教育図書 翻訳（共訳）	原作は2006 年に出版されたSarah Fermiの手になるEmily’s Journal。これまで数多くの「伝記」が書かれてきたが、本作は、あくまでも、Fermiによる創作日誌の形を採る。エミリ・ブロンテが垣間見たシャーロット、アンとの日常、姉と妹のあいだにあって一人ハワースに残されたとエミリが感じ取り苦悶した内容など、確かにFermiが「書き直した」自伝の体裁を採ってはいるものの、その内容はジェランやギャスケル、ウィニフリスが描き出したエミリ像にかなり近似している。創作故に一般の読者にも読みやすい文体となっているために、エミリ・ブロンテの生涯を概略的に理解するための入門書に準えられるといっても過言ではない。全253頁、分担訳。(pp.98～108)
9.ブロンテ作品における語りの再考：シャーロット・ブロンテと霧	単	2012年01月	「Purple Heather :日本ブロンテ協会関西支部ニューズレター」　第11号 （日本ブロンテ協会関西支部）	ブロンテ姉妹の作品において、自然描写が語りの一部として機能していることを、ヒリス・ミラーの批評理論を引き合いに出しながら、特に、シャーロットの遺作となった『ヴィレット』第9章を中心に再検討した。
10.キャロル・シールズ著、『ジェイン・オースティンの生涯――小説家の視座から』	共	2009年05月	世界思想社 翻訳（共訳）	原著は2001年に出版されたCarol ShieldsのJane Austen: A Lifeである。担当箇所（第九章）では、小説家としてオースティンの出発点となる『ノーサンガー・アビー』が誕生するまでの秘話が伝記的な側面を多分に踏まえたうえで綴られている。シールズは、小説家としての視座から、オースティン研究を専門にしてはいないものの、伝記の断片として作家の生涯を「きめ細かい散文で再構築」(New York Timesのreview)し、描き出している。全23章、219頁。(pp.99～108)
11.アン・ブロンテの詩の解釈における、ブロンテ姉妹像の一考察	単	2008年7月	「Brontë Newsletter of Japan 」第74号（日本ブロンテ協会）	本エッセイでは、アン・ブロンテの手になる「釣鐘草」の詩を、ブロンテ姉妹の歴史的記述を基に考察した。アンの小説『アグネス・グレイ』において「釣鐘草」は単に一つの植物にはあらず、主人公のアグネスにとっては、自己認識を示す指標でもあった。作品に記されたキーワードを読み解くことに、ブロンテ文学を鑑賞する醍醐味があると論じた。
12.語り手Jane Rochester再考――Jane Rochesterが「語る」もの	単	2008年02月	「Purple Heather :日本ブロンテ協会関西支部ニューズレター」第7号（日本ブロンテ協会関西支部）	『ジェイン・エア』についての研究の成果を学会で発表したのち、ナラトロジーの視点から再度発表内容を振り返り、自伝的小説における客観的な「視点」についての概要にまとめた。
13.学会活動（全国大会）の報告レポートの作成	単	2008年01月	「Brontë Newsletter of Japan」第72号（日本ブロンテ協会）	全国大会の学会発表4篇、講演会とシンポジウムの概要を報告した。記載にあたっては、文学研究における発言者の意図を明示する工夫を加えて、今後の課題と研究に繋がる研究報告レポートを作成することに努めた。
14.アン・ブロンテの名言集についての一解釈	単	2007年01月	「Brontë Newsletter of Japan」第69号（日本ブロンテ協会）	アン・ブロンテがロビンソン家で「ガヴァネス」をしていたときに一輪の花に思いを寄せた。1840年8月22日にアンが謳った詩の解釈を通じて、ブロンテ姉妹の詩の一側面を考察した。
６．研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2022年8月～現在	英国ブロンテ・ソサエティー会員
2.2008年04月～現在	日本英文学会・日本英文学会関西支部会員
3.2007年1月～現在	日本ブロンテ協会（2023.10～評議員就任予定）および、日本ブロンテ協会関西支部（2020.８まで事務局運営委員、2020.9～現在、関西支部：事務局次長）
4.2006年04月～現在	関西学院大学英米文学会会員
5.1994年04月～現在	津田塾大学大学院英文学会会員